

# 陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.51 2011.6.15

第6号(24年10月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で62年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。



久しぶりで、良人と街へ出た。

良人の亮作は、三杯の大コップで、いいご機嫌になっている。映画を見た。ビヤホールにはいり、町子も、ひと口ふた口のまされた。酔っている亮作に寄り添うやうに歩いていて、町子は、たのしくてしかたがなかった。赤くなっている亮作の横顔を、ちらッとちらッと盗み見てはこみあげてくる、幸福感に我ながら酔った気持ちに溺れている。— 待った甲斐があった。— と、思ふ。

— よくこそ、生きて還つてくれた。

と、しみじみ思ふのだった。さつき、ビヤホールで「よう、須賀じゃないか!」と、亮作に話しかけてきた男があった。

町子は、良人から、学生時代の友達で、目崎だ、と紹介された。

ふたりの男は、ビールをのみながら話しはじめた。町子がぼんやり周囲の浮き立つ喧騒ぶりを眺めていると、亮作は、そんな町子を、ちらッと横眼で見て、目崎にいった。

「こいつは、バカな奴でねえ。」  
町子は、びっくりして良人を見た。

「僕がねえ、こいつと結婚して、半年目に応召したんだよ。それから、三ヶ月前に僕が、ソ連から還ってくるまでの七年間、じいっと待つてくれたんだからねえ。」

「あなた!」  
「何?」

と、こつちを見て、嬉しげな顔で、  
「いいじゃないか!」

町子は、目崎に羞かしかった。  
「だつてえ……。」

「留守中は、実に苦勞したらしいんだ。一日中、何も食べなかつたことも、あるといふんだよ。そんな苦勞をするくらいなら、いい男を見つけて、生きてるか、死んでるかかわからん僕なんか放つといてさつさと再婚しちまへばいいんだよ。」

良人は、町子の無事な顔を見て、ほろほろと涙を流したことを、まるで忘れてしまったやうにいつている。が、実はこいつは、バカな奴でねえ、と反対表現をすることで、当時のよろこびを、酔った胸の中で反芻しているのだとは、町子にもわかつていた。

「あなた、もう、やめて頂戴。」  
笑いながら聞いていた目崎がいった。

「須賀。そのバカな奥さんのために、乾杯しよう。」  
「うん、乾杯とは、悪くないねえ。」

ふたりの男は、町子のために、ほんたうにコップをあけてくれた。

そのときの情景を、町子は、思ひ出しながら歩いていった。

みなみの盛り場は、秋の夜風に、爽やかでさへある。店々の灯は、濡れたやうな光を放っている。人も、いまが絶頂であつたらう。

向うから、口紅の濃い女がやってきて亮作の顔を見ると、急に、  
「あらー。」

と、立ちどまった。が、亮作は、気がつかないで、いき過ぎやうとしている。

女が、呼んだ。  
「須賀さん、じゃない?」  
亮作は、やっと、振り向いた。

女の顔が、瞳がなつかしげに笑ひかけている。つられて、亮作も、微笑んだ。微笑みながら、相手が誰だか、咄嗟には思ひだせず、もどかしがっている風である。

女は、敏感に、それを察したらしい。  
「わからないらしいわねえ。亮ちゃん」

「あー。」と、亮作が、いった。  
女は、ちらッと町子を見た。

○源氏鶏太・けんじけいた  
(一九二一—一九八五) 富山県出身。ユーモア小説を得意とした直木賞作家。

(後略)

# 信仰例話 (道友社刊『真実の道』より)

## 杉岡氏の入信記 (後編)

昭和十七年帰朝して、当時創設された日本医療団につとめた。戦争末期から戦後にかけて、重視される結核撲滅の任務をになった。二十一年四月の国会総選挙に推されて岐阜県から立候補した。そして選挙区内を演説して回るうち、痲疾(持病)の肺病が再発して投票日を数日にひかえて咯血し、選挙はめっちゃめっちゃに敗北した。

療養施設はお手のものだから、東美濃の景勝地恵那峡の山上にある療養所の一棟を独占して、絶対安静の静養にはいったが、三十九度以上の連続発熱と咯血で病勢は悪化するばかり、極度の衰弱で手足は骨と皮ばかり、診療に当たってくれた専門医たちもさじ

を投げ、親交のあった主治医はそれとなく私に最後の決意を勧告してくれた。このとき、生家にいた母が、当時の交通地獄をおして、時々病床を訪ね、やさしく親神様のお慈悲を説いて私の反省をうながし、

そして静かにわが通り来た過去をふりかえった時、心にかんだ一切は我執と我欲のみにくい姿のみであった。はじめに天理教をきらったのも、反対したのも、やつぱりそれであった。妻を失ったのも、或いはさまざまの苦難にあったのも、今こうして重患に苦しんでいるのも、おも



涼やかに流れる布留川

また、しばしば教会へ参つて、七十才の老婆にかえて倅に余命を与えられ、御恩報じをさせてやっていただきたいと祈りつづけてくれた。その真実にふれた私は、強く胸うたれるものがあつた。

いおこせばことごとく、真理を無視し、天の理に反して、わが身思案にさまよつたときが苦しみの絶頂であつた。なお、眼にみえぬ、心に浮かばぬ過去の因縁が、今この床上の牢獄の姿ではないか。わが

身可愛い、我欲、自分さえよければ人はどうでもいいといふ、みにくいかたまりが、今の私の苦悩する姿そのものである。にもかかわらず、今なお息一すぢ、天地の御親のふところの中に生かされている私はあまりにも御親の御恩を忘れた不孝の子であり、忘恩の徒であつた。

私はおわびの涙に咽んだ。この上は地位も名誉も、行きがかりも一切をなげうつてこの体をそのまま神様へお供えして、世のため、人のために働かせて頂き、報恩の道に進み、信心一筋の生活に入ろうと堅く決意して神様にお誓いした。

すると不思議にも、にわかには病勢がぐんぐん軽快に進み、医師たちがおどろくほどの経過をたどり、生死の境から甦つた。

おかげで今年五十六才の病気の身が、毎日汽車、電車、自転車でかけ回って布教出来るほど健康を与えて頂いて、日々喜ぶという事の外は何も考えたことがない。

(時報特別号 昭二六・二・二五)

## 養徳社 よもやま話

○月○日 陽気発送の宛名印刷機式号機。格安で購入し十億枚を超す印刷履歴があつた。印刷のたびエラーが頻繁に起つていた。宛名印刷に支障をきたす為、社内に置いていた壊れた同初号機の分解を行い、主となる集積回路基盤を交換した。基盤の交換後、印刷を試みるとスムーズに動いてくれた。

この修理で、より永く使えることを願つた。  
○……五月に東日本大震災の被災地で活動する災救隊の取材のため、岩手県へ向かった。滞在中、数名の現地の方から話を聞く機会があつた。その中で、出動地域の自治会長から津波に襲われる町の様子を写した二枚の写真を見ていただいた。「帰つたら被災地の現状を人に伝えてください」と。その表情から思いの強さが見てとれた。

精力的に活動する災救隊を見て、励まされ再び顔を上げて歩み始めた人たちがいる。二日間にわたる取材を「陽気」七月号に掲載しました。ご覧ください。

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。

養徳社

## 第1回公募

# 養徳社エッセイ賞

作品集 募集

選者 出久根 達郎 (直木賞作家)  
枚数 400字詰め原稿用紙8〜10枚  
締切 平成23年8月31日

入賞 一等正賞楯 副賞10万円 (二名)  
佳作正賞楯 副賞3万円 (二名)

※詳細は『陽気』7月号67頁をご覧ください。